

巻頭のご挨拶

社団法人 北海道林産技術普及協会
会長 高橋 秀 樹



皆様 明けましておめでとうございます。

平成22(2010)年の新春を会員皆様とご一緒にお慶び申し上げます。

また日頃より当協会の運営に対し、ご指導ご協力を賜り誠にありがとうございます。

今年は寅年であります。

北海道立林産試験場は昭和25年(1950年)設立で、正に寅年生まれであり、今年で設立60年の還暦となります。還暦というのは干支が一巡して起算点に戻る意味です。

北海道立林産試験場は昭和25(1950)年、戦後の本道復興には木材産業の発展が必要であり、そのために北海道独自の木材研究機関の設立が不可欠との考えにより旭川に設立されました。

北海道の大雪山系には豊富な木材資源があり、その資源を背景にして山系の裾野広く、多くの造材業、製材工場、合板工場そして家具工場が生産活動を始めておりました。当時、木材の加工技術や木材の材質的知識を最も必要としていた地域として、ここ旭川に設置が決まったのです。

初期の頃の役割は製材工場の挽き立て方法や、歩留まり向上、鋸の目立て方法や合板の単板歩留や、そり曲がりの防止、単板の乾燥など、製造方法や、生産効率、歩留まり向上という正に生産工業そのものであったといえます。

その後、特殊合板、集成材などの高度加工木材時代には精度、乾燥、接着技術の開発に大きな役割を果たしました。

さらに一斉造林によるカラマツ間伐材の有効利用に注力し、現在の針葉樹合板やサンギや梱包材に有効利用される道をつくりました。

また細菌研究から食用キノコの人工栽培という成果を上げました。さらにその技術は木質細胞から有効成分の抽出などの生物化学の世界に入っています。

最近ではホルマリンやVOCなどのシックハウス対策などの化学レベル、CO₂対策などの科学レベルの研究の方向にあります。

さて60年経って、北海道の木材資源は大きく変わりました。

北海道の山林は産業用資材というより道民の森として自然保護や市民の憩いの森となり、天然林から人工林が主流となりました。

試験場の研究内容も上の如く変わり、また行政改革により試験場は北海道の独立行政法人化の方向にあります。正に60年経って還暦=起算点に戻り、新しく再出発するという事でありましょう。

北海道林産普及協会は林産試験場設置3年後に設立され、試験場と民間木材産業を結ぶ役目を果たして参りました。私共は今後とも試験場と共に活動して参ります。本年も皆様のご支援を宜しくお願いいたします。